

国際対応専門委員会の議事概要

企業会計基準委員会

1. 日時 平成 17 年 12 月 9 日(金) 10 時 00 分～12 時 00 分

2. 場所 (財)財務会計基準機構 会議室

3. 議題

(審議事項)

- (1) 12 月開催の IASB 会議の議事対応について
 - 概念フレームワーク
 - 公正価値測定
 - テクニカル・プラン

4. 議事概要

(審議事項)

(1) 12 月開催の IASB 会議の議事対応について

● 概念フレームワーク

12 月開催の IASB 会議では、 質的特性 - コスト・ベネフィット、 構成要素 - 資産の定義、及び 報告企業 - 予備的スタッフリサーチが議論されることが説明された。

質的特性 - コスト・ベネフィットについては、現状の IASB、FASB フレームワークと他のコスト・ベネフィットについて記述された文献の分析をもとに、現状のフレームワークより、多くの情報を要求することを表明することを、統合されたフレームワークに記述するスタッフ提案がなされていることが説明された。

構成要素 - 資産の定義については、現在の IASB の資産の定義は、

「資産とは、過去の事象の結果として当該企業が支配し、かつ、将来の経済的便益が当該企業に流入することが期待される資源をいう。」

であるが、これを、

「企業の資産とは、企業に対して有利なキャッシュ・フローを生み出す能力をもつ、現存する経済的資源に対する、現在の権利又は他のアクセスである。」

に変更するスタッフ提案がなされていることが報告された。

また、報告企業 - 予備的スタッフリサーチについては、この分野について現状の IASB、FASB フレームワークでは明記されていないため、報告企業概念が記述されているオーストラリア、イギリスのフレームワーク、FASB のドラフト文書をスタッフが分析した結果及び報告企業概念に対するアプローチのスタッフ提案が説明された。このなかで、財務報告の

目的と親会社説、経済的単一体説等の報告企業概念との関係が議論されていることが説明された。

その後の質疑応答においては、以下のような、質問及び意見が述べられた。

- 親会社説と経済的単一体説の議論を概念レベルで議論する必要があるのか。アジェンダ・ペーパーには特定の方向に誘導しようとする意図が感じられるという意見に対しては、山田 IASB 理事より、報告企業概念を統合された概念フレームワークに含めることは、以前に暫定合意されており、また、企業結合のプロジェクトで、親会社説と経済的単一体説の議論が問題となっているので、先に議論を進めることにしたものであるとの回答があった。
- 財務報告の目的と親会社説、経済的単一体説等の報告企業概念との関係に関して、「財務報告は、現在の普通株主又は他のいかなる単一の利用者グループの観点ではなく、企業(entity)の観点を反映すべきである。」というのはひとつの考え方だが、それだけでは直ちに親会社説の排除にはならないと考える。
- 概念フレームワークでの資産の定義に関して、現行の IASB、FASB(及び日本の討議資料)とも、支配と過去の取引・事象が共通で含まれているが、スタッフ提案ではこれらを置き換えることが提案されている。なぜ、現在コンバージェンスされているものを変える必要があるのか。
- 資産の定義に関するスタッフ提案に対する我々の懸念は、過去の取引・事象がなくなったこと、及び支配がなくなったことに集約されると思うが、きちんと議論したほうが良いと考える。
- 資産の定義を変えることで自己創設のれんの計上は排除されないのではないかという意見に対して、現行のフレームワークでも自己創設のれんを排除できていないが、認識規準の運用で排除されているとする意見、現行のフレームワークでは排除されているという見方もできるし、排除されていないという見方もできるのではないかという意見が述べられた。
- 資産の定義に関するスタッフ提案で、希少性(scarcity)や他者のアクセスを排除するという、経済的な資源や資源に対する私的な支配の本質的な部分が、定義の本文から落ちて補足的に付記されていることが不自然だと考える。
- コスト・ベネフィットの議論において、情報開示のコストも投資家のリターンに反映するため、最終的には投資家が負担する。現状 IASB、FASB フレームワークのような、ベネフィットは作成者・投資家の双方が受けるが、コストは主として作成者が負うという議論には意味がない。コスト・ベネフィットの比較が投資家の間で異なる点に着目すべきである。
- IASB と FASB の共同プロジェクトで検討中の項目については、ASBJ の IASB とのコンバージェンス・プロジェクトの第 1 フェーズの対象範囲に含まれていないため、概念フレームワークに関する日本の意見も IASB の議論に十分に反映されないのではないかという懸念が示された。それに対して、山田 IASB 理事より、ASBJ は、リエゾン国の一員としていつでもプロジェクトに対する懸念を表明することが可能であるとの回答があった。また、斎藤委員長、西川副委員長から、日本の懸念は、直接 IASB に発信するつもりであり、山田 IASB 理事を通して伝え

ていく、また、コンバージェンス・プロジェクトの会議においても、プロジェクトのテーマ以外の事項についても意見交換を行っているとの回答があった。

● 公正価値測定

9月IASB会議で、公正価値測定がアジェンダに追加された。その目的は、その他の基準書が求める場合に、資産及び負債の公正価値の測定方法に関する指針を提供することである。また、9月会議では、FASBの最終基準を、IASBの公開草案として公表し、IASBがFASBの結論に同意しない箇所をコメント募集に記載することも決議した。

今回の国際対応専門委員会では、11月IASB会議の教育セッションで行われたFASBの基準書案の内容と、12月IASB会議で公正価値の定義及びプロジェクトの範囲について議論されることが説明された。また、FASBの公開草案の内容については、公正価値のヒエラルキーとして活発な市場における同一資産・負債の相場価格を反映する市場の情報であるレベル1から、企業の情報であるレベル5までのヒエラルキーが規定されていること、市場参加者の観点から考慮される、資産の最高かつ最善の利用（使用 or 交換）により、評価前提が異なること等が説明された。

その後の質疑応答においては、以下のような、質問及び意見が述べられた。

- FASBの基準書案では公正価値の定義を出口価格としているが、この定義に従うと、現行で当初認識において公正価値で測定することが定められている基準は当初認識時に出口価格で測定することになり、変ではないかという意見が出された。これに対して、山田IASB理事より、スタッフは自分が調達してきた市場（例えば卸売市場）を参照市場とすれば、出口価格と入口価格に大きな差がないと考えているよだとの回答があった。しかし、この解釈については、卸売市場と小売市場といった参照市場の違いが決め手だというなら、入口価格と出口価格の差は、参照市場の違いであって売るか買うかの違いではないということにならないかとの指摘があった。
- 公正価値のヒエラルキーについて、評価方法の選択の優先順位という意味なのか、そこまでは言わないのか、また、評価方法の選択の優先順位だとすると、市場が活発でなければ、ヒエラルキーが下位の理論モデルのほうが信頼性がある測定ができるのではないかという、IAS第39号でも議論になったことが問題になるのではという意見があった。それに対して、山田IASB理事より、公正価値のヒエラルキーは、評価方法の選択の優先順位であり、IAS第39号でも議論になった点は、引き続き問題点であると考えられるという回答があった。
- FASB基準案にある、レベル1、レベル2-4、レベル5に分類した金額の開示は、実務上は適用が困難であると考えられる。
- 資産の最高かつ最善の利用が使用である場合の使用中の公正価値の意味については、資産に関する企業自身の期待を反映している（主観のれんを含む）IAS第36号の使用価値（＝主観価値）ではなく、市場参加者が存在する資産を使用した場合の価値（市場平均 客観のれんを含む）と考えられるとの意見があった。一方、そうだとすると、

資産の最高かつ最善の利用が使用である場合の公正価値の見積りについて、売買価額の参照市場とは異なる別のルールを決めようとしていることと実質的に同じことを言っているのではないかとの指摘もあった。

- テクニカル・プラン

IASB の各プロジェクトの進捗状況と今後のタイムテーブルが説明された。

その後の質疑応答においては、以下のような、質問及び意見が述べられた。

- 業績報告に関して、JIG ミーティングがセグメント B の予定に入っているが、セグメント A に関する議論をしないのかという質問に対しては、山田 IASB 理事及び IASB の業績報告プロジェクトに参加している鈴木専門研究員から、今後 JIG ミーティングでセグメント A を議論する予定はないが、公開草案に前後してラウンド・テーブルを行うことが検討されているとの回答があった。また、FASB がセグメント A について公開草案を出さないとの決定を下した背景については、FASB は 1 計算書方式の方向をはっきり打ち出す意図があるため、2 計算書方式を認める (IASB と同様の) 公開草案を出さない決定をしたという理解であるとの回答があった。

以上